

雨降ッ少女

湯ノ浦ユウ



雨降り少女

雨が降ると、なんだか懐かしい気持ちになることが多い。

雨が降ると、何もしないで家に閉じこもる時間が好き。

雨が降ると、気まぐれで散歩に出かけてみるのも好き。

私は雨に縛られることなんて全くなかった。

今日は日曜日。高校もお休みだし、部活も雨でお休み。

朝早くの練習中止の連絡網によって、今日一日何もするところがなくなってしまった。

耳を澄ませば外からは雨の音が幾つも幾つも重なって聞こえてくる。

目を閉じて、外の音に集中すると、そこには淡い水玉模様の世界が広がるように感じる。

お昼ご飯を済ませ、部活のユニフォームの部屋干しを終えると、私は傘を持って外に飛び出した。

お気に入りの水玉模様の傘を開くと、わくわくせずにはいられなかった。

目的地は近所の公園。

外に出てみると雨は家の中で聞いていた音ほど強く感じることはなかった。

公園に向かう途中の道では誰ともすれ違わない。雨音だけの空間が続いていく。

まるで自分だけみたい。私しかここにいないみたいだ。

なんだか楽しみを独占したような気持ちになった同時に、分かち合える人がいないことにも気が付いてしまった。

少しだけ曖昧な気持ちが息を詰まらせた。

公園に着くと屋根付きのベンチに座り、傘を閉じる。

家の中とは違い、外で聞く雨の音は何かどこかに染み渡っている気がした。

普段は沢山の子どもで賑わうこの場所も今日はお休み。今日ぐらいはゆっくり休んで欲しい。

「私も少しだけ一緒に休ませてもらうね」

-----。

雨の音が私の世界を満たしていき、私はその音にそっと寄り添った。

まるで時間が止まったみたい。

ゆっくりと流れる時間っていうものが確かにここに存在する気がした。

私、雨が好きなんだな。

雨音に湿った空気、水たまりにぬれた地面の匂い、傘の模様にぬれたアスファルトの匂い。どれもこれも、みんな好きなんだな。

気持ちが良くなって、私は少しだけベンチに横になって雨を全力で楽しむ。

やがて雨音は私の意識から遮られていった。

-----。

「早百合、起きて」

誰かに体を揺すられている。私何してたんだっけ。たしか公園に来て……。

私はハッとしてすぐさま我に返る。どうやら寝てしまったようだった。

目の前には同じクラスの友達の花春が心配そうな顔をして立っていた。

「こんなところで寝てると風邪引いちゃうよ」

「ありがとう。ごめんね心配かけちゃって」

「別にいいよ。それよりなんでこんな雨の日にこんなところにいたの？傘も持っているみたいだし、雨宿りではないわよね？」

はてな顔の花春の質問に一つ一つ答えていく。

「私、雨の日って好きでさ。散歩したり、こうやって公園まで来て雨の音を聞いてたりするの」

「へー、意外ねー」

「意外とか言わないでよー」

花春の意地の悪そうな表情を見て思わず顔が赤くなっていくのが分かった。

「やっぱり柄じゃないかなー」

ため息混じりに花春に問いかけると、

「そんなことないでしょう。さっきはちょっとからかっただけよ。私も好きよ、雨の日って優しい感じがしてさ」

私はその言葉を聞いて一安心する。分かってくれる人がいてくれて良かったと胸を撫で下ろした。

「そういえば花春こそこんな日に公園まできて何するつもりだったの？」

「私？私は公園の絵を描きに来たの」

花春はそう言うと、持っていた鞆からスケッチブックを取り出す。

そういえば花春が美術部に入っているのは知っていたけど、絵を見せてもらうのは初めてのことだった。

「ほら、前に書いたのはこんな感じ」

渡してもらったスケッチブックのページをめくると、そこからは一つの世界が飛び出してくる

。淡い水色の世界。透明で透き通った色彩感覚。現実で目の前に広がる雨の日の公園がスケッチブックの一ページにも広がっていた。

「言ったでしょう？私も雨の日って好きよ」

花春は微笑みながら私の顔をのぞき込む。それを見て私も思わずつられて笑ってしまう。

そんな時間が雨のリズムに合わせて時間を刻んでいく。

なんだか不思議な気持ちになれる時間で、空間で、出来事だった。